

中学校道徳教科書における少数者の扱いの検討

藤川 大祐

千葉大学教育学部

2019年度より中学校で使用される道徳教科書全8社24冊について、「友情、信頼」他に関して性のあり方はどのように扱われていてLGBT等への配慮は見られるか、「家族愛、家庭生活の充実」他に関して虐待等で苦しむ者への配慮は見られるか、「我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度」他に関して外国にルーツをもつ者への配慮は見られるかを検討した。検討の結果、LGBT等については3社での扱いが確認でき、ジェンダー・ステレオタイプを批判的に扱っている教材も見られたものの、異性愛を当然とした教材が多い等、LGBT等への配慮に課題があることが確認された。虐待等で苦しむ子どもへの配慮や外国にルーツをもつ者への配慮は、ほぼ見られなかった。こうしたことから、2019年度以降の中学校の道徳授業においては、少数者に配慮した教材を別途扱う等の対応が必要となることが確認された。

キーワード：道徳、教科書、少数者、家族、LGBT

1. 道徳教育における少数者の扱い

1.1. 道徳教科化といじめ問題への対応

2018年度より、小学校で一部改訂学習指導要領が本格実施され、「特別の教科」としての道徳が正式に始まった。

そもそも道徳の教科化は、2013年に出された教育再生実行会議第一次提言「いじめ問題等への対応について」¹⁾において、「子どもが命の尊さを知り、自己肯定感を高め、他者への理解や思いやり、規範意識、自主性や責任感などの人間性・社会性を育むよう、国は、道徳教育を充実する」「道徳の教材を抜本的に充実するとともに、道徳の特性を踏まえた新たな枠組みにより教科化し、指導内容を充実し、効果的な指導方法を明確化する」として打ち出されたものであった。

だが、藤川(2018a)で詳細に検討したように、道徳の教科化が具体化されていく中で、道徳といじめ防止との関係は不明確になり、小学校学習指導要領(文部科学省2015a)や中学校学習指導要領(2015b)には「いじめ」という語が使われていない。

さすがに学習指導要領解説(文部科学省2015c、文部科学省2015d)では、道徳といじめとの関係が記述されている。藤川(2018a)で検討したように、解説は、主にいじめ加害者の心理に言及し、人間としての弱さや同調圧力に従う態度、生命を軽視する態度がいじめにつながることを示唆し、「いじめを生まない雰囲気や環境

を醸成する」こと等を求めている。他方で、解説では被害者側や傍観者の立場への言及は限られており、被害者に対しては相談することを促す内容となっている。だが、加害者はいじめをしてはいけないことを十分に認識していながらいじめにあたる行為をしている場合が多いと考えられること、被害者も誰かに相談するよう言われていながら相談できないことが多いと考えられることから、学習指導要領解説がいじめ問題の解決に資するべく踏み込んだ議論をしているとは言い難い。

学習指導要領の記述に戻ろう。いじめに直接言及していないばかりか、藤川(2018a)で論じたように、学習指導要領にはいじめを助長する恐れのある記述が見られる。すなわち、少数者を排除する考え方がうかがわれる記述が多く見られるのである。

たとえば、「感謝」や「家族愛、家庭生活の充実」については、「日々の生活が家族や過去からの多くの人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それに応えること」(文部科学省2015a)、「父母、祖父母を敬愛し、将来の生き方について考えを深め、勤労を通じて社会に貢献すること」(文部科学省2015b)といった記述が見られ、親などの家族は感謝や敬愛の対象としてのみ扱われている。こうした記述には、両親と子どもが幸せに暮らす家族を標準とし、虐待が生じている家庭等、標準に該当しない少数者を排除する考え方がうかがわれる。同様に、学校生活についても教師は敬愛する者だということが前提になり、性についてもLGBT等は想定されておらず、外国にルーツをもつ者などいないかのように「日本人としての自覚」(文部科学省2015b)が求められている。

以上のように、学習指導要領はいじめ問題への対応に

直接結びつくものではない上に、少数者を排除する発想が見られることから逆にいじめを助長する恐れのあるものとなっている。いじめ問題に直接対応していないことも問題であるが、そのこと自体はいじめ問題を悪化させるものではない。だが、いじめを助長する可能性があることは深刻な問題である。

1.2. 小学校道徳教科書における少数者の扱い

では、こうした学習指導要領に基づいて作成され、2018年から使用されている小学校道徳教科書においては、少数者はどのように扱われているであろうか。

藤川（2018b）で検討したように、小学校の教科書においても、少数者への配慮を欠いていると考えられる点が多く見られる²。

たとえば、「友情、信頼」に関しては、学習指導要領で性に関して LGBT 等への配慮がないことを反映して、LGBT 等に配慮した教材は小学校教科書には掲載されていない。

また、「家族愛、家庭生活の充実」については、子どもが親などの家族に不満を抱きながらも、家族からの愛情を知るといった話が並び³、虐待等で苦しむ子どもへの配慮を見いだすことはできない。

「国や郷土を愛する態度」については、和風、和食等の「和」の伝統のよさを示す教材が多い⁴。日本の伝統について理解を促すものとしての意義はあるかもしれないが、外国にルーツをもつ者への配慮は見られない。

以上のように、小学校道徳教科書では、学習指導要領を反映して、LGBT 等、家族からの虐待に苦しむ者、外国にルーツをもつ者といった少数者への配慮を欠いていると考えられる点が多く見られる。このことは、こうした教科書を用いた授業が進むことによって、少数者を排除することが促されてしまい、いじめを助長してしまう可能性があることを意味する。

では、小学校教科書から1年遅れて2019年度より使用される中学校道徳教科書においては、少数者はどのように扱われているであろうか。

2. 本研究の目的と方法

2.1. 本研究の目的

本研究は、2019年度より使用される中学校道徳教科書において少数者がどのように扱われているかを明らかにし、これら教科書を用いた授業がどのようになされるべきかを検討するものである。

2.2. 研究の方法

本研究が対象とするのは、2019年度より中学校で使用される予定の「特別の教科 道徳」用検定教科書全8社、計24冊である⁵。

各教科書全教材を対象に、以下の点について検討し、結果を整理して述べる。

- 1) 「友情、信頼」他に関して、性のあり方はどのように扱われていて、LGBT 等への配慮は見られるか。
- 2) 「家族愛、家庭生活の充実」他に関して、虐待等で苦しむ者への配慮は見られるか。
- 3) 「我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度」他に関して、外国にルーツをもつ者への配慮は見られるか。

3. 検討の結果

3.1. 性のあり方に関して

「友情、信頼」については、学習指導要領（2015b）で「異性についての理解を深め」ることが求められていることを受け、異性間の恋愛や友情に関わる教材を各社が取り上げている。男子と女子がつきあっていると誤解されて困惑する話である「サキとタク」（学研教育みらい2年⁶）、男子から女子への恋愛感情の話である「クラスメイト」（学研教育みらい1年⁷）や「チョコの行方」（教育出版1年⁸）、女子から男子への恋愛感情の話である「恋する涙」（日本文教出版2年⁹）といったものである。学習指導要領が「異性」についての理解を求めているので当然ではあるが、恋愛について扱っているこれらの教材はすべて異性愛を扱っており、同性愛は取り上げられていない。

「異性についての理解を深め」ることに関して、男らしさや女らしさ等のジェンダーに関わる問題を取り上げている教材も見られる。編み物をする男子が主人公でサッカーや釣りが得意な女子が親友として登場する「親友」（光村図書1年¹⁰）、女子が応援団長を行うことについて議論がなされる「たすきとポンポン」（教育出版2年¹¹）、男女の友人間で「女の子らしさ」が問題となる「フットライト」（教育出版3年¹²）である。こうした教材はジェンダーに関するステレオタイプを批判的に検討することにつながるものと考えられ、LGBT 等に関する理解にも間接的につながる可能性があるものだと考えられる。

他方、「男子」「女子」といった枠組みを前提に「異性についての理解」を扱っていると思われる教材も見られる。東京書籍1年¹³の「班での出来事」である。この教材は「中学生になってから、男子と女子とはだんだんはなれるようになってきた」と始まり、「男子が女子におしつける」「男子と女子の意見が合わない」「女子にこのことを話してみた」等、登場人物たちが「男子」「女子」という枠組みで自分たちを見ることが繰り返される。物語自体は男女の違いを越えて班員が仲良くなっていく話なのだが、「男子」「女子」という枠組み自体は疑われることはない。この教材では、ジェンダーに対するステ

レオタイプが強調されている上にステレオタイプに対する批判はなされないために、ステレオタイプを助長しうるものと言える。

「友情、信頼」として LGBT を扱っているのは、日本文教出版 3 年¹⁴のみであった。男子の女子への恋愛感情¹⁵を描いた「ゴリラのまねをした彼女を好きになった」という教材の次のページに「参考」として「さまざまな性」という 1 ページのみの記事が掲載されている。「さまざまな性」の中では、「ひとくちに男性、女性といっても、性にはさまざまなあり方があります」として「体の性 (生物学的性)」「心の性 (ジェンダー・アイデンティティ、性自認)」「好きになる性 (性指向)」「表現する性 (性表現)」についての説明等が掲載されている。直前の教材「ゴリラのまねをした彼女を好きになった」は職場体験学習で保育園に行った際に男子に人気にある女子がゴリラのまねをした話であり、女の子らしさを相対化する内容であると言えないことはないが、ジェンダーに関わる問題を扱っているとまでは言い難い。このため、「さまざまな性」の掲載は唐突な印象を与えるものと言える。

以上のように、「友情、信頼」に関しては、異性間の恋愛や友情を取り上げているものが中心であり、ジェンダー・ステレオタイプを疑う方向の教材も見られる一方で、ジェンダー・ステレオタイプを強化する恐れがある教材も見られた。LGBT について直接扱っている教材は 1 ページの短い記事 1 点だけであり、同性愛やトランスジェンダー等、LGBT に直接関わる内容を具体的に扱っている教材は皆無であった。

他方、「友情、信頼」以外の項目に関連して LGBT 等に関する教材を載せている教科書が 2 種類見られた¹⁶。

学校図書 2 年¹⁷では、「公正、公平、社会正義」の項目のものとして、「自分らしい多様な生き方を共に実現させるためにできること」という 6 ページの教材が掲載されている。この教材では、前半で「セクシュアリティの 3 要素」として「からだの性」「こころの性」「好きになる性」が紹介される等、多様な性についての説明がなされ、後半で NPO 法人 ReBit¹⁸が行った多様な性を学ぶ勉強会の様子を報じた新聞記事の内容が掲載されている。多様な性について考え方を整理した上で具体的な動きについても紹介されている。

日本教科書 2 年¹⁹では、「相互理解、寛容」の項目のものとして、「だから歌い続ける」という 4 ページの読み物教材と「友達の詩」という楽曲の歌詞 1 ページが「届けたい言葉」として掲載されている。「だから歌い続ける」は、男性として生まれたが心は女性である性同一性障害の主人公が、中学校時代の担任の先生の理解を得て音楽を支えにした内容であり、教材中に明記されていないが性同一性障害のシンガーソングライターで

ある中村^{あたる}中²⁰の話だと考えられる。そして、「友達の詩」は、自身が作詞・作曲した中村の代表曲だ (2006 年発売)。これらの教材では、日本文教出版の「さまざまな性」や学校図書の「自分らしい多様な生き方を共に実現させるためにできること」のように LGBT や多様な性についての概念を説明してはおらず、中村と思われる性同一性障害の人物の物語と中村の歌詞が掲載されているのみであり、扱いは教師に委ねられているように見える。

以上のように、学習指導要領では LGBT 等への配慮が見られないものの、3 社が LGBT について扱っていることが確認でき、うち 2 社は全体で 5~6 ページのまとまった教材を掲載していた。とはいえ、この 2 社のシェアは合計で 2.7% であり、日本文教出版を含めても 3 社のシェア合計は 28% にすぎない。中学校の道徳の授業において、教科書で LGBT 等について学ぶ機会のある者は少ない。

3.2. 家族に関して

「家族愛、家庭生活の充実」については、学習指導要領が「父母、祖父母を敬愛」することを求めていることを反映して、多くの教材が親や祖父母の思いに気づき、親や祖父母に感謝すべきことを扱っている。たとえば、東京書籍 3 年²¹の「背筋をのぼして」は家業のクリーニング屋を継ぐことを期待されていた中学生が自分で別の進路を決めた門出に父からの愛情を実感した話であり、学研教育みらい 2 年²²の「美しい母の顔」は顔にはやけどの跡がある母親が幼い頃の自分を火事から助けたときに負傷したことを知り母をほこりに思う話である。

こうした親や祖父母への感謝に関する内容と異なるものとしては、日本文教出版 2 年²³の「きいちゃん」がある。手足に障害をもつ「きいちゃん」という高校生の担任と思われる教師の視点で描かれており、きいちゃんが姉の結婚式に出ないよう母に言われて悲しんでいるのを受け、教師ときいちゃんとの姉へのプレゼントとしてゆかたを縫ったところ、姉の希望できいちゃんと教師が二人とも結婚式に出た話である。視点が家族以外の人物であることが珍しい上に、子どもが親等の愛情に気付いて感謝する話でないことも独特である。

「家族愛、家庭生活の充実」についての教材はすべて、親や祖父母は我が子を大切にしており、子どもが感謝すべき存在として描かれている。愛情があるとは言えない親や歪んだ愛情で子どもを苦しめる親は、一切登場しない。このような教科書を扱うことは、虐待に苦しむ子どもに対して、それでも親等に感謝しなければならないと教えることを意味し、虐待を受けている子どもにも配慮す

るところか、二次的な被害を生じさせる可能性がある。

3.3. 外国にルーツをもつ者に関して

「我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度」については、小学校の教科書と同様、和食や和風等の「和」が「優れた伝統」として扱われているものが並ぶ。その中で、外国との関わりを含めて「和」の伝統を扱っているものが多い。東京書籍 2 年²⁴『和食』の良さってなんだろうはカレーやラーメンが日本の国民食になったことに言及しており、学校図書 1 年²⁵の「言葉の壁は『日本舞踊』で乗り越えた」は日本舞踊を通じて日本文化を海外に広げる活動をしている人を取り上げている。学研教育みらい 1 年²⁶の「日本人の心と技」は狂言や琵琶を愛する外国人や落語を海外に広げる日本人の話を取り上げ、学校図書 3 年²⁷の「命に響く『雅楽』」は雅楽が外来の音楽と日本の音楽が融合してできたこと、現代でも多様な音楽とのコラボレーションをしていること等を述べている。光村図書 3 年²⁸「障子あかり」はフランス人工業デザイナーのルイ・ルポア氏が日本の障子に関心をもった話であり、学研教育みらい 3 年²⁹「タウトが見た白川郷の合掌造」は日本の建築に注目したドイツ出身の建築家ブルーノ・タウトの話だ。日本教科書 3 年³⁰「小泉八雲が見た出雲の国」は日本に魅力を感じて日本で過ごしたギリシャ出身の小泉八雲のことを取り上げている。

また、外国の人と接する中で中学生等の人物が日本について考えるという話がいくつかある。日本文教出版 2 年及び光村図書 2 年³¹の「さよなら、ホストファミリー」や学校図書 2 年³²の「日本人として」である。

これ以外に、教育出版 3 年³³の「外国から見た日本人」という 2 ページの短い教材は、東日本大震災で日本人が「ガマン」していることについての外国人の見方を紹介したものである。

以上のように、「我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度」の教材の中には、外国との関わりを含めて書かれているものが多く、日本の伝統の良さだけを外国とのかかわり抜きに述べているものばかりではない。だが、こうした教材においても、外国にルーツをもちながら日本で暮らす子どもへの直接的な配慮が見られるものはない。

なお、外国にルーツをもちながら日本で活躍した人の実話を取り上げた教材として、中華民国籍の元プロ野球選手、王貞治氏を取り上げた廣済堂あかつき 2 年³⁴及び学校図書 2 年³⁵掲載の「国」がある。日本で生まれ育ちプロ野球でホームラン記録を打ち立てる等して活躍した王氏は、日本国籍がないにもかかわらず日本で国民栄誉賞を授与されている。その王氏が、父の祖国である中国と母の祖国である日本の両方について、自分なりの愛

国心があると語っている。このような教材であれば、外国にルーツをもつ子どもへの配慮にもつながるかもしれない。

4. 考察

本研究では、中学校の道徳教科書について、LGBT 等、虐待等に苦しむ者、外国にルーツをもつ者といった少数者への配慮がどのように見られるのかを検討してきた。

まず確認すべきなのは、道徳教科書を見る限り、一部の例外を除いて、LGBT も虐待も外国にルーツをもつ者も、なかったことになっているということである。LGBT については少数の教科書が取り上げていたものの、これらを除けば、人間は男と女に単純に二分され、男女間で恋愛感情を抱くことを当然とする教材ばかりであり、1 点だけであるが「男子」「女子」という枠組みが否定されることなく強調されている教材もあった。虐待に関しては、虐待をする親等は全く登場していない。外国にルーツをもつ者も、王貞治氏を除けば、全く登場していない。こうした状況は小学校の教科書とほぼ同様である。学習指導要領が少数者に配慮した記述となっていない以上、全体としてこうした傾向になることは当然だと考えられる。

他方、少数者への配慮につながる可能性があるとするところの教材も見られた。性のあり方については、LGBT を扱っていないとしても、ジェンダー・ステレオタイプを扱っている教材があった。ジェンダーについて敏感になることは LGBT 等の多様な性について理解し、受け入れることにつながると考えられる。また、家族については、教師の視点で障害をもつ人物と姉との関係が描かれている教材があった。障害児・者を兄弟姉妹にもつ者については、寂しさや孤独感を抱きやすいという否定的な面が見られる一方で、責任感、寛容さ、誠実さを身につけられるという肯定的な面もあることが指摘されており（たとえば、桑山 2017）、こうした者が登場する教材は家族について単に親や祖父母に感謝するものとは異なる描き方をしているという点で、虐待がある家族等を描くことへの道を拓くものと考えられるかもしれない。外国にルーツをもつ者に関しては、外国に関係する教材は多く掲載されており、今後外国人労働者が増えること³⁶等を考えれば、日本在住の外国人の視点を取り入れて「我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度」に関する教材が増える可能性はあると言えるだろう。

また、LGBT に関しては、3 社が扱っていたもののすべて異なる項目の教材として位置付けられていたことに注意が必要である。どの項目で扱うかによって、

LGBT を扱う観点が異なってくるのが考えられる。当面は学校や地域が工夫して扱っていくしかないだろうが、内容が偏ることを防ぐために、教材や実践の情報が広く共有される必要があるだろう。

一部の例外は見られるものの、中学校道徳教科書には全体として少数者への配慮が見られない以上、2019年度からの中学校における道徳授業では学校が意識的に少数者への配慮を行うことが求められる。教科書を「主たる教材」として扱うことを前提にしたとしても、特に少数者の扱いについては他の教材で補充することが不可欠である。少数者に配慮した授業の基本的な方法としては、藤川 (2018b) で論じたように、ステレオタイプの考え方を批判し、「それは誰にもあてはまるのか」を問うことが求められる。異性への恋愛が扱われているときに異性に恋愛を感じない人もいるのではないかと問い、男子あるいは女子というアイデンティティが前提となっているときにそうしたアイデンティティに違和感を覚える者はいないのかと問う。親への尊敬が扱われているときに親を尊敬できない者はいないのかと問い、日本人のあり方が問われているときに他の国にルーツがある者はどうなのかを問うのである。

こうした方向でつくられている教材もある。

たとえば、書籍『みんなで道トーク!』シリーズ³⁷では、男であることに違和感をもっている子ども、暴力をふるう父親を尊敬できない子ども、親の一人が外国人であることからいじめを受けている子ども等が登場する。そうした登場人物がどうすべきかを問うことによって、「考え、議論する道徳」の授業を行えるようになっている。

また、いじめ防止動画教材シリーズ「私たちの選択肢」³⁸では、女性であることに違和感を抱いているトランスジェンダーの中学生の選択を描き、やはり「考え、議論する道徳」の授業が行えるようになっている動画教材が収録されている。

今後このような教材が多く開発され、適切に教科書を補えるようになることが望まれる。

なお、本研究では少数者として LGBT 等、虐待等に苦しむ者、外国にルーツをもつ者を取り上げたが、当然ながら配慮が必要な者はこれらに限られるわけではない。特に、発達障害を含む障害をもつ者については別途検討が必要である。障害については、学習指導要領上の特定の項目と対応していないこともあり、丁寧な検討が必要である。このことについては、今後の課題としたい。

収録の「家族のために」。

⁴ たとえば、東京書籍『新しいどうとく 5』収録の「ぼくのお茶体験」、日本文教出版『小学道徳 生きる力 5年』収録の「ぼくのお茶体験」。

⁵ なお、2019年度の中学校道徳教科書のシェアは、産経新聞2018年11月9日「中学道徳教科書シェア、東京書籍が3割でトップ」によると以下の通りである。

東京書籍	34.8%
日本文教出版	25.3%
光村図書	16.0%
教育出版	10.1%
学研教育みらい	5.7%
廣済堂あかつき	5.4%
学校図書	2.4%
日本教科書	0.3%

<https://www.sankei.com/life/news/181109/lif1811090038-n1.html> (2018年12月26日最終確認)

⁶ 『中学生の道徳 明日への扉 2年』

⁷ 『中学生の道徳 明日への扉 1年』

⁸ 『中学道徳 とびだそう未来へ 1』

⁹ 『中学道徳 あすを生きる 2』

¹⁰ 『中学道徳 1 きみがいちばんひかるとき』

¹¹ 『中学道徳 2 とびだそう未来へ』

¹² 『中学道徳 3 とびだそう未来へ』

¹³ 『新しい道徳 1』

¹⁴ 『中学道徳 あすを生きる 3』

¹⁵ 教材中の表記は「性同一性障がい」であるが、本稿では一般的な表記である「性同一性障害」という表記を用いる。

¹⁶ 朝日新聞「『性的少数者』道徳教科書で初の掲載 8社中4社で」(2018年3月27日)等の報道では検定時点で4社がLGBTを取り上げているとされているが、教科書で確認できたのは日本文教出版、学校図書、日本教科書の3社だけであった。<https://www.asahi.com/articles/ASL3W51VBL3WUTIL03R.html> (2018年12月27日最終確認)

¹⁷ 『輝け未来 中学校道徳 2年』

¹⁸ 認定NPO法人 ReBit。「LGBTを含めた全ての子どもが、ありのままの自分で大人になれる社会を目指す」法人。公式サイトは以下。

<https://rebitlgbt.org> (2018年12月27日最終確認)

¹⁹ 『道徳 中学校 2 生き方を見つめる』

²⁰ 2006年メジャーデビューのシンガーソングライター。戸籍上は男性で心は女性であることを公表して活動している。

²¹ 『新しい道徳 3』

²² 『中学生の道徳 明日への扉 2年』

²³ 『中学道徳 あすを生きる 2』

²⁴ 『新しい道徳 2』

²⁵ 『輝け未来 中学校道徳 1年』

²⁶ 『中学生の道徳 明日への扉 1年』

²⁷ 『輝け未来 中学校道徳 3年』

²⁸ 『中学道徳 3 きみがいちばんひかるとき』

²⁹ 『中学生の道徳 明日への扉 3年』

³⁰ 『道徳 中学校 3 生き方を創造する』

³¹ 『中学道徳 2 きみがいちばんひかるとき』

³² 『輝け未来 中学校道徳 2年』

³³ 『中学道徳 3 とびだそう未来へ』

³⁴ 『中学生の道徳 自分を考える 2』

³⁵ 『輝け未来 中学校道徳 2年』

³⁶ 2018年12月8日、改正入国管理法が成立し、2019年4月より日本は多くの職種で外国人労働者を受け入れることとなった。家族の帯同は認められていないので、すぐに外国にルーツをもつ子どもが増えるとは言えないが、こうした方向で外国人受け入れが進めば、日本国内で外国にルーツをもつ子どもが増えていくと考えられる。

³⁷ 藤川大祐監修、田中六大漫画、河出書房新社、2017年。漫画を中心とした小学生向け書籍3冊シリーズであり、中学校でも道徳授業に活用されている例がある。

¹ https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai1_1.pdf (2018年12月26日最終確認)

² 以下、シェアの大きい東京書籍及び日本文教出版の教科書を中心に例示する。

³ たとえば、東京書籍『新しいどうとく 4』収録の「おかあさんのせいきゅう書」、日本文教出版『小学道徳 生きる力 5年』

³⁸ 千葉大学、敬愛大学、柏市教育委員会、ストップイットジャパン等による共同プロジェクトで作成された教材シリーズであり、シリーズ全3作の動画教材がDVD付冊子として配布されている。以下参照。

<http://stopit.jp/workshop> (2018年12月27日最終確認)

引用文献

藤川大祐 (2018a) 『道徳教育は「いじめ」をなくせるのか—教師が明日からできること』、NHK出版

藤川大祐 (2018b) 『道徳授業の迷宮—ゲーミフィケーションで脱出せよ』学事出版

桑山友里 (2017) 「発達障害児・者のきょうだいに関する研究と支援の動向」、中央大学心理学研究科・心理学部紀要、17(1)、pp.63-72

文部科学省 (2015a) 『小学校学習指導要領』(平成27年3月一部改正)

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/_icsFiles/afieldfile/2015/03/26/1356250_1.pdf (2018年12月26日最終確認)

文部科学省 (2015b) 『中学校学習指導要領』(平成27年3月一部改正)

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/_icsFiles/afieldfile/2015/03/26/1356251_1.pdf (2018年12月26日最終確認)

文部科学省 (2015c) 『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2016/01/08/1356257_4.pdf (2018年12月26日最終確認)

文部科学省 (2015d) 『中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2016/01/08/1356257_5.pdf (2018年12月26日最終確認)